

お母さん この電車 バスみたいな音がするね！

小学一年の夏の終わり 私は 母に連れられて新宿から生まれて初めてのディゼル列車に乗った

…そうね 電車なのよね

母は窓の外に広がる吹き抜けのターミナルの 大きな天井のそのまた向こうに目を遣っているかのようだった

子供の頃の私はただただ初めての豪快なエンジン音に聞き惚れていた

やっと読むことができた 米 という漢字の入った行先の意味するところも知らずに

どれだけ長いこと揺られただろう…はじめ全速力で電車と徒競走をしていた列車はいつしか山を貫き谷を越える単線の線路を走っていた

お母さん 反対の電車とぶつからないの？

大丈夫よ そういつのはね きっと ちゃんとなっているの…

いつもなら子供の自分にも分かり易く丁寧に教えてくれる母が どこかガラスの壁の向こう遠くの世界にいる人のように思われた

途中 白河という駅で列車はしばらく停車した 母は ちょっと待っていてね と言いつとどこかへ消えて行ってしまった

もしかしたら僕はここで捨てられるのかもしれない という根拠のない不安がよぎる 車掌の案内に聞く パンガンとかハクデンとかいう硬い響きの線名に 知らぬ土地だ 遠くまで来てしまったのだと 思わず体が震えるのを止められなかった

隣りにきれいな特急列車が到着し 田舎へのお土産だろうか？大荷物を持った乗り換えの客がどつとこちらへ乗り込んで来る

まもなく発車しますと案内放送が流れたその時 久しぶりに見たわずかな笑みを浮かべた母が 通路の向こうにそっと現れた

両手に小さな陶器の器を持って

お弁当を買って来たわ

いつの間にかスピードも落ちてゆつくりと峠を登って行く列車の中 それまでずっと黙っていた母の表情が緩んでくる

山を降りると眼下にコバルトのような深い藍に染まる水面(みなも)が 上等なヒロードをわっと広げたように目に飛び込んできた

ふと母を見遣ると そこにはもう新宿を出た時のようなあの狐でも化けて出ているのかというような不思議な面持ちは消えていた

何 お母さんを見ているの？ これはね 猪苗代湖

この国で四番目に大きな湖 会津の電力の源よ

そう語る母はどこか誇らしげだ

会津若松で小休止すると列車は光り輝く稲穂の中を滑り行く 傾きかけた陽に照り映える金色のうねりに 世の中にこんな景色があったものかと 息を呑む

陽も傾きかけた頃 私たちは 温泉 というのも名ばかりの およそ観光地風情のない小さな駅で降り立った 改札の錆びついた柵の向こうに 初めて会う 祖母と名乗る腰の曲がった女性が迎えに来てくれていた

こんなめんこいこめらっこに 前来たときはまだ母さんさつぷわっちゃんあ

手をこまねき話しかけてくる言葉は半ば分からぬが 僕がここへ来るのは初めてではないらしい

小さな軽トラに乗せられて祖母の家に近づくと田畑は耕されていないところが目立って来た 陽も山に隠れ 急に冷たい風が吹き下ろす

そして目の前に山肌を削る重機が山の頂に残る最後の夕陽を浴びて傾いたまま止まっているのが見えた

祖母がぼつりと口火を切った

おめえも今回は大変だったけどね おらほもぼつぼつね タムさこせるゆうから 日中の駅もまもなく山の上さ移転する言いつてね しょね

はつきりしてはいないが どうやら僕と母は今後いよいよこの村で過すことになるらしいと、そしてこの村が消えてなくなるのだということが ぼんやりと理解できた

